增訂 萬葉植物新考

松田 修 著

増訂 萬葉植物新考

松田　修著

社会思想社刊

著者略歴

松田　修（まつだ　おさむ）
1903年　山形県に生る
1928年　東京大学農学部卒業
専　攻　植物文化史
現　在　社団法人「日本植物友の会」副会長兼事務局長
著　書　『万葉の花』『源氏の花』『花と文学』（芸艸堂），『あの花・この草』（牧書店），『花を読む』（弥生書房），『万葉の植物』（保育社），『日本の花』『野の花・山の花』『花ごよみ』『路傍の草花』『花の歳時記』（社会思想社）他
現住所　東京都世田谷区砧2-7-12

増訂 萬葉植物新考　©1970

昭和45年5月15日　初版第1刷発行

定価　3200円

著者　松田　修
発行者　二宮敏夫

株式会社 社会思想社
発行所　(101) 東京都千代田区神田駿河台 3—5
電話代表 (03) 292—2611
振替東京 71812

落丁・乱丁は直接小社にお送りください。
印刷・製本／凸版印刷

3092-55018-3033

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

はしがき

萬葉集に現われた植物を研究しようという試みは、巻末の〝萬葉植物研究書史〟にみるように、徳川時代の鹿持雅澄にはじまり今日幾多の著書がある。しかしこれらの多くは、萬葉品物解の域を脱せず、またその解説も學的に吟味すると疑問のあるものも多い。私の萬葉植物研究は最初この點に出發したものであるが、しかし研究の領域は、單に萬葉植物の吟味ということだけでなく、それを通じて上代の自然や上代人の自然觀賞、さらには生活との結びつき、また、その植物が後世の日本文學にどう反映しているかまで觀察しようとするものであつた。〝萬葉植物新考〟はこの研究體系に立つてその基礎を明らかにしているばかりでなく、その植物考證も從來の品物解よりは一歩を進めたものとして、幸い識者の目にとまり、澤瀉久孝博士の〝萬葉集注釋〟（中央公論社版）をはじめ他の注釋書にも採用され、またこれを探し求めている人も多いことを知つた。しかしこれは千部限定版だつたので、古本市場に出ることも少なく、たまに古本市場に出たものも當時定價四圓八拾錢のこの本が、今日一萬五千圓の定價（一九六九年・井上書店古書目録）がついているといつたぐあいで、我ながら驚き入つた次第である。しかしこの本も、すでに四十年の年月が流れて、是正すべき點もあり、さらにその後の研究も追加して內容をととのえ、定本として殘るような改定版を出したいものとかねて考えていた次第であつたが、このたび社會思想社の編集長八坂安守氏の暖かい友情と厚意のすすめによつてここに增訂〝萬葉植物新考〟を出版することになつた。かつて二十代に自分の一生をかけたこの萬葉植物の研究が人生もやがて終りに近づきつつある今日、うずもれることもなく、この一卷におさめられ、再びこの世に出ることは、私の人生の最後をかざるものとして喜びこれに過ぎるものはない。

增訂版は舊版の體系をこわすことなく、從來の解說篇にさらに研究篇と研究書史篇を加え、また、舊文は讀み易い新假名遣いに改めた。

願わくばこの本が世に傳つて、これからも多くの萬葉學者、萬葉愛好家、あるいは植物學者、植物關係者その他同好者などのご批評とご指導をいただきたいものと思う。學問の道は一生つづくのである。

なお最後にこの厖大な增訂〝萬葉植物新考〟の編集を擔當されて、いろいろお世話下された社會思想社編集部河村忠雄氏の勞に對し、深く感謝したい。

昭和四十五年三月

松田　修

凡例

一、この本は、「校本萬葉集」を底本とし、その中から植物名と思われるものをえらび、便宜、草本類（苔、海藻、水草をふくむ）、木本類、竹笹類、雑類の四つに分類し、植物名は五十音順に配列した。

二、本の体裁と内容は、解説篇、研究篇、研究書史篇の三章から成り、

(一) 解説篇では、(1)初めに萬葉植物名を掲げ、萬葉植物用字、現代植物名、科名を記し、(2)次に萬葉の全例歌を擧げ、訓と歌詞は、武田祐吉校註「萬葉集」（角川版）により、疑問のあるものについては「新訓萬葉集」その他萬葉注釈書によつた。(3)考證を第一とし、あらゆる文獻によつてこれを考證し、(4)考證によつて定まつた植物は、主として「牧野・新植物圖鑑」により解説し、その他大井次三郎博士の「日本植物誌」や「資源植物事典」などを参照した。なお、解説の中には舊版とちがつているのもあるが、これは増訂版のものが、私の最終の意見であることをご了承いただきたい。(5)また萬葉植物が後世の文學に如何に現われているかを知るため、日本文學の全域にわたつてこれをあさりその主なるものを掲げた。

(二) 研究篇には、私の萬葉植物に關する研究論文を掲げて参考に供した。

(三) 研究書史は、萬葉植物はこれまでどういう人によつて、どんな研究がなされてきたかを知るために記載した。

三、さし繪は、その植物の實態を明らかにするため、生態寫眞を用いた。但し總名のものや植物未詳のものには、これを掲げていない。

四、索引は、萬葉植物名をさがす便のため、五十音順にならべ、未詳植物、總名のものを除いて學名も掲げておいた。

目次

はしがき……i
凡例……iii

第一章　解説篇

一　草本類……一
あかね　二　あきのか　四　あさ　五　あさがほ　一〇
あし　一七　あしつき　二三　あは　二五　あふひ　二八
あやめぐさ　二九　あをな　三三　いちし　三五　いね　四一
いはゐづら　四八　うけら　五三　うはぎ　五五　うも　五七
うり　五九　おほゐぐさ　六三　おもひぐさ　六四　かきつばた　六七
かたかご　七一　かほばな　七四　からあゐ　七八　きみ　八三
くず　八六　くそかづら　八九　くれなゐ　九一　こけ　九四
こなぎ　九七　こも　九九　さはあらぎ　一〇三　しだくさ　一〇四
しば　一〇五　しりくさ　一〇八　すげ　一一〇　すすき　一一五

すみれ　一三一
ちがや　一三一
ところづら　一四二
なはのり　一五三
ねつこぐさ　一六五
はまゆふ　一八七
ひめゆり　一九六
み　ら　二〇三
むらさき　二一三
やまあゐ　二三七
わかめ　二四〇
を　ぎ　二五〇
せ　り　一二四
つきくさ　一三六
な　ぎ　一四四
にこぐさ　一五四
は　ぎ　一六八
ひ　え　一八九
ひ　る　一九八
み　る　二〇五
め　二一七
やますげ　二三九
わすれぐさ　二四二
をみなへし　二五三
た　で　一二七
つちはり　一三九
なでしこ　一四六
ぬなは　一五六
はちす　一七九
ひかげかづら　一九一
ふぢばかま　二〇〇
む　ぎ　二〇八
も　二一九
ゆ　り　二三三
わらび　二四五
たはみづら　一三〇
つづら　一四〇
なのりそ　一五〇
ぬばたま　一五九
はながつみ　一八三
ひ　し　一九四
ま　め　二〇二
むぐら　二一一
ももよぐさ　二二五
よもぎ　二三七
ゐ　ぐ　二四七

二　木本類……二五七

あしび　二五八
あべたちばな　二七一
うまら　二八〇
か　し　二九六
かには　三〇六
あぢさゐ　二六一
あをぎり　二七三
う　め　二八二
かしは　二九九
かはやなぎ　三〇七
あづさ　二六三
いちひ　二七五
え　二九三
かづのき　三〇二
かはらふぢ　三〇九
あふち　二六八
うのはな　二七六
おみのき　二九五
かつら　三〇四
か　へ　三一一

かへるで　三一三
こなら　三三三
さくら　三三三
しらかし　三四九
たちばな　三六七
つがのき　三八一
つつじ　三九〇
つるばみ　四〇〇
にれ　四〇八
ははそ　四一七
ふぢ　四二六
まつ　四四一
もも　四五八
やまちさ　四七四

からたち　三一五
このてがしは　三三四
さねかづら　三四一
すぎ　三五一
たまばはき　三七五
つき　三八三
つばき　三九二
なし　四〇一
ねぶ　四〇九
はじ　四一三
ひ　四三三
ほよ　四三五
みつながしは　四五一
やまたちばな　四六九
ゆずるは　四八〇

くは　三一六
さかき　三三六
しきみ　三四三
すもも　三五四
ちさ　三七七
つげ　三八六
つまま　三九六
なつめ　四〇四
はねず　四一五
ひさぎ　四二四
まき　四三七
むろのき　四五六
やまたづ　四七一

くり　三一九
さきくさ　三三九
しひ　三四六
たく　三五六
ちち　三七九
つた　三八八
つみ　三九八
なら　四〇六

三　竹笹類……四八五
たけ　四八六
さささ　四九一
しの　四九三
すず　四九七

四　雑類……五〇一
あざさ　五〇三
あをみづら　五〇四
きくわく　五〇六
くくたち　五〇八

さうじゆ　五〇八　たまかづら　五〇九　つぎね　五一〇　むし　五一〇
らん　五一三

第二章　研究篇

一　牧野博士の「萬葉集スガノミの新考」について……五一七
二　萬葉の「菅藻」について……五一九
三　土針について……五二三
四　紫草について……五二八
五　萬葉未詳植物考……五三三
(1)　「壹師」について
(2)　「いはゐづら」について
(3)　「たはみづら」について
(4)　「はながつみ」について
(5)　「つまま」について
(6)　都萬麻開眼
(7)　萬葉集の「壹師の花」の正體
六　萬葉植物の植物分布……五五六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第三章　萬葉植物研究書史
索　引……卷末

一草本類

あかね

茜萃　茜　赤根　安可禰

アカネ　アカネソウ科

萬葉歌

集中　あかね　とみえる歌次の十三首。

1　三〇　あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る（額田王）

2　一六九　あかねさす日は照らせれどぬばたまの夜渡る月の隠らく惜しも（柿本人麻呂）

2　一九九　かけまくも　ゆゆしきかも……埴安の　御門の原に　あかねさす　日のことごと……（柿本人麻呂）

4　五六五　大伴のみつとは言はじあかねさし照れる月夜に直に逢へりとも（賀茂女王）

6　九一六　あかねさす日並べなくにわが戀は芳野の河の霧に立ちつつ（車持千年）

11　三三三　長谷の齋槻が下にわが隠せる妻　あかねさし照れる月夜に人見てむかも（柿本人麻呂歌集）

12　二九〇一　あかねさす日の暮れぬれば術を無み千遍嘆きて戀ひつつぞ居る

13　三三七〇　さし焼かむ　少屋の醜屋に……あかねさす　晝はしみらに　ぬばたまの　夜はすがらに……

13　三三九七　玉だすき　かけぬ時なく……妹にし逢はねば　あかねさす　晝はしみらに……

15　三七三二　あかねさす晝は物思ひぬばたまの夜はすがらに哭のみし泣かゆ（中臣宅守）

16　三八三七　飯喫めど　甘くもあらず　行き往けど　安くもあらず　あかねさす　君が情し　忘れかねつも

19　四一六六　時ごとに　いやめづらしく……嬢子らが　珠貫くまでに　あかねさす　晝はしめらに……（大伴家持）

20　四四五五　あかねさす晝は田たびてぬばたまの夜の暇に採める芹子これ（葛城王）

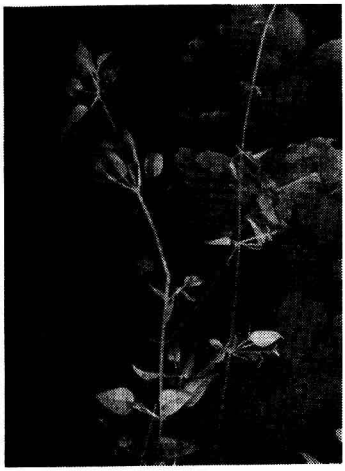
考　證

以上の歌にみるように萬葉歌ではアカネの植物の形態や花をよんでいる歌は一首もなく、すべて紫・日・月・照・

畫などにかかる枕詞として使われている。これは萬葉人が植物としてのアカネよりもこの根の色に興味をもつていたからであろう。また萬葉集には茜染という文字はみえないが、これはムラサキなどと共に上代染料の一つであつたことは、「萬葉染色考」その他に染色學的に考證されているし、中國では古くからこれを栽培して染色に用いていたことが、本草綱目に「根紫赤色此卽今染絳(もみ)者也」とあり、また、西洋でも古くから同屬の西洋アカネが染料に用いられていた。

植物

アカネの漢名は茜草で、この字義について「本草綱目」に「茜有二東方一而少不レ如二西方多一故爲レ西」とある。和名のアカネは、小野蘭山の「本草綱目啓蒙」に「茜草　アカネ　根赤キ故ニ名ヅク」とあり、寺島良安の「和漢三才圖會」にも、「案茜ハ赤根也」と記している。和名は根の赤色に基づいたものであるが、じつさいは生根は帶黄色で、これを乾燥すると赤黄色になる。植物としては日本、朝鮮、中國に分布し、本州、九州の山地にはこの大形のオオアカネを産する。丘陵地や垣根などに生え、よじのぼつて生育する。多年草で、莖は方形で小さい逆さトゲがある。葉は四輪にみえるが、じつはその一對は隣の二葉の托葉が合生したものである。葉は先がとがつた卵形で、秋に白色五辨の花序を出す。根は太く帶黄色で、この根中にアントラキノン系の色素をふくんでいるので上代はこれを緋色の染色に用いた。染色には根を煎じた液の未だ熟さないうちに預め灰色で處理した布を浸すこと數回で染付を完了する。灰色が多いと赤味が勝ち、少ないと黄味が勝つ。アカネはこの染色のほかに漢方ではこの根を茜草根といつて、喀血、鼻血、血尿などの止血藥とし、また解熱強壯藥に煎劑として用いる。



あかね

文　學

このアカネが萬葉以後の日本文學にどう現われているかをみると、多くは萬葉集の傳統をひいて枕詞として現われているものが多い。例えば、

茜さす光は空にくもらぬをなどてみゆきに眼をきらしけん（源氏物語）

天の原あかねさし出る光にはいづれの沼かさえ殘るべき（新古今）

くもりなき君が御代には茜さす日置の里もにぎはひにけり（風雅和歌集）

といつた類で、この「あかねさす」の枕詞は現代の短歌にも用いられている。さらに平安文學をみると茜染の文字がみえ、「落窪物語」に、

ここも修理させなん、疾くわたりなん、急ぎ給へとて紅の絹、茜、染草とも出し給へれば

などとあるのは、茜染がこの時代に榮えていたことがわかる。しかし茜染は平安から江戸時代と下るにしたがつて衰え、以後の文學にはほとんど現われていない。

まつたけ

あきのか　秋香　マツタケ　マツタケ科

萬葉歌

集中　あきのか　とみえる歌は次の一首だけである。

芳を詠める

10　三三三　高松のこの峯も狹に笠立ちて盈ち盛りたる秋の香の宜さ

考　證

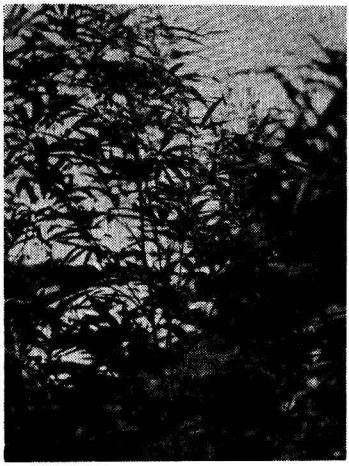
この歌の序に「詠芳」とあるのに「大矢本」「京大本」は芳

の側にカホリヲと訓を附し、宣長は芳は茸の誤りであるといつている。私はこの歌の歌趣から考えて、芳を茸の誤りとする説には贊成できない。これは明らかに歌趣から考えて松茸を指しているもので、その題材がまことにめずらしい。

植　物

マツタケはおもに秋に赤松林に發生する。わが國獨特の茸で、赤松林に生えるが、粘板岩・石灰岩・ロームの地方には赤松があつても生えない。初めは先の太い棍棒狀であるがのち傘は次第に大きくなり球狀になりさらに山形から遂に扁平に開き、傘の表面は茶褐色で、「本草和名」に「菌茸狀如二人著一笠」と記しているのもこの歌と對照しておもしろい。昔から「香い松茸味しめじ」といわれているようにこれは芳香を有し味もよく、本邦産食用きのこの王者として今も賞用されている。

あ　さ　麻　安佐　朝　アサ　クワ科



萬葉歌

集中　あさ（麻　安佐　朝）の他に　を（苧　麻）そ（麻　素　蘇）とあるのもみなこのアサを指しているもので、萬葉集にはアサの歌が計三十一首の多きに上つている。（但し呼名から一種のものを二六八七及び三四八四はアサとヲ、二七九一はヲとソの部にも掲げてあるから、嚴密にはアサの歌は二十八首ということになる）

あさ（麻・安佐・朝）

あさ

1　垂　朝裳（あさも）よし紀人（きびと）羨しも亦打山（まつちやま）行き來（く）と見らむ紀人羨しも（坂

門人足）

2　一九九　かけまくも　ゆゆしきかも……つかはしし　御門の人も　白細の　麻衣著　埴安の……（柿本人麻呂）

4　五三一　庭に立つ麻手刈り干し布曝す　東女を忘れ賜ふな（常陸娘子）

4　五四三　天皇の　行幸のまにま……玉だすき　畝火を見つつ　麻裳よし　紀路に入り立ち……（笠金村）

5　八九二　風雜り　雨降る夜の……寒くしあれば……麻衾　引き被り……（山上憶良）

7　一二九五　麻衣著ればなつかし紀の國の妹勢の山に麻蒔け吾妹

7　一三〇九　人ならば母の最愛子ぞ麻裳よし紀の川の邊の妹と勢の山

7　一三六五　今年行く新島守が麻衣肩のまよひは誰か取り見む

7　一四〇五　秋津野を人の懸くれば朝蒔きし君が思ほえて嘆は止まず

9　一六八〇　朝裳よし紀べ行く君が信土山越ゆらむ今日ぞ雨は降りそね

9　一八〇〇　小垣内の　麻を引き干し　妹なねが　作り著せけむ　白細の　紐をも解かず……（田邊福麻呂）

9　一八〇七　鶏が鳴く　吾妻の國に……勝鹿の　眞間の手兒奈が　麻衣に　青衿著け　直さ麻を　裳には織り著て……（高橋蟲麻呂）

11　二六八七　櫻麻の苧原の下草露しあれば明してい行け母は知るとも

13　三三三四　かけまくも　あやにかしこし……麻衣著るは　夢かも　現かもと　曇り夜の　迷へる間に　朝裳よし　城上の道ゆ……

14　三四五四　庭に立つ麻布小衾今夜だに夫よし來せね麻布小衾

14　三四八四　麻苧らを麻笥に多に績まずとも明日著せさめやいざせ小床に

を（苧・麻）

6　一〇五六　をとめらが績苧繋くとふ鹿脊の山時の往ければ京師となりぬ（田邊福麻呂）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com